様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０３０９９

研究課題名（和文）5～7世紀におけるモンゴルの土城址および中央アジアの交易路に関する総合的研究

研究課題名（英文）An Comprehensive study of the Castle in the Mongolian Period and Central Asia's trade routes in the 5th and 7th centuries

研究代表者
中田　裕子（NAKATA, YUKO）

龍谷大学・農学部・講師

研究者番号：７０５９８９８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の発掘調査において、8世紀時代の陶器片などが多数発見され、モンゴル以前よりこの地に聚落があったことが明らかとなった。
また、 2016年9月の調査では、モンゴル帝国時代に作られた等身大の仏像の一部と思われる足と手が発見され、C14年代測定による分析結果から13世紀後半に作成されたものであることが判明した。当時のモンゴルでは仏教が信仰されていなかったことから、この仏像は、現地に居住していた漢人のためのものであったと考えられ、モンゴルは漢人たちの信仰を尊重したということが証明された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
歴史学者や考古学者など分野の違う研究者が連携して研究することにより、これまで知られていなかった遊牧民の農耕、交易の実像を明らかにすることができた。また、本研究課題において、モンゴル高原における遊牧民の活動の歴史的意義を正しく評価することができ、日本の高い文献研究の能力と成果をモンゴル現地の研究者との協力によってさらなる高い研究成果につなげて行くことができた。また、モンゴル国・中国との共同研究により、国際的な視野に立った研究を行うことができた。

研究成果の概要（英文）：In excavation of 2016, the ceramics pieces of the times were discovered a lot in the eighth century, and it was revealed that there was a colony more in this ground before Mongolia.
In the investigation of September, 2016, A part of hand and foot of Buddha statue made for Mongol Empire Era were discovered, what was made in the late thirteenth century by carbon-14 dating analysis became clear. From the discovery mentioned above, in the remains of Harzanshireg, it was revealed that it was the colony that there were the religion facilities with the Buddha statue for Genghis Kahn Era.Because Buddhism was not believed in in then Mongolia, it was thought that this Buddha statue was a thing for the Chinese who lived in the field, and it was proved that Mongolia respected the faith of Chinese.

研究分野：中央アジア史

キーワード：遊牧民　高車　柔然　モンゴル　交易路

１．研究開始当初の背景

（１）1996 年より開始された日本・モンゴル共同プロジェクト、通称「ビチェース・プロジェクト」（「ビチェース」はモンゴル語で「碑文」の意味）は、長年にわたりモンゴル国現存の碑文の調査・研究を行なってきた。プロジェクトのメンバーたちが申請し、採択された科研費によって調査を連綿と継続して現在に至っている。プロジェクトの研究対象は、主に突厥時代からモンゴル時代に至るまでの碑文であった。その研究成果はまず、当初の日本側代表であった森安孝夫（現大阪大学名誉教授）とモンゴル側代表 A.オチル（現モンゴル国際遊牧文明研究所）の共同編集によって、1999 年に報告書が刊行された［森安・オチル 1999］。その後、プロジェクトは日本側の代表を松田孝一（現大阪国際大学名誉教授）に代え、主にモンゴル帝国・元朝時代の碑文に特化して現在に至るまで継続され、その間の研究成果は様々な形で公刊されており、2013 年 3 月には、先の報告書刊行以降に発見された碑文も含め、これまでの研究を整理する形で、松田とオチルの共同編集によって改めて研究成果報告書が刊行されている。ビチェース・プロジェクトの研究対象は、その名の通り、碑文や銘文など、文字で書かれたものが中心であるが、それと並行して、これまでにも各時代の遺跡の調査も数多く行なってきた。

その中で、本プロジェクトの最も大きな成果は、モンゴル帝国時代の重要な軍事拠点であったチンカイ・バルガスの発見とその調査・研究であったと言える。

チンカイ・バルガスとは、モンゴル帝国の創始者チンギス・カンが、1212 年に功臣の田鎮海に命じ、モンゴル西部のアルタイ地方に建設させた軍事拠点である。史料では、「チンカイ・バルガスン」と「ン」を付けた形も見られるが、ここでは、現在のモンゴル語で「城」を意味する「バルガス」に統一しておく。チンカイの地では屯田が開かれ、鉄製品の生産も行なわれるなど、大規模な兵站基地として 1219 年からのチンギス・カンの中央アジア遠征を支え、さらには 1260 年のクビライ即位後も、カイドゥら中央アジアの反クビライ派のモンゴル勢力に対する元朝側の最前線基地として重要な意味を持った。

プロジェクトでは、2001 年と 2004 年の 2 度の現地調査と文献からの研究を踏まえ、モンゴル西部のゴビアルタイ県シャルガ郡にあるハルザンシレグ遺跡がチンカイ・バルガスに当たると考えた。2014 年にモンゴル・日本共同「ビチェース」プロジェクト隊が試掘を行った結果、この地よりモンゴル支配以前の層と見られる部分から木片と骨片が出土し、C14 測定によって分析した結果、5、6 世紀時代のものであることが判明した。当時、この地を支配していた遊牧民は、モンゴル系とみられる柔然やトルコ系遊牧民・高車であると考えられている。アルタイ山脈付近における柔然、高車の拠点は、これまでに確認されておらず、この時代の遺跡として史上初の発見といってよい。また国内外においても、まとまった現地調査を行った研究は見られなかった。

（２）農耕と交易を行う過程で、商人や農耕民が居住するための城郭が必要となるため、モンゴルでは数々の都市遺跡が築き上げられたが、近年、前述したハルザンシレグ土城とその付近にみえる農耕地跡が発見された。これまで、モンゴル高原西部の遊牧民の農耕に関して、研究が進んでおらず、その具体像は明らかになっていない。漢文史料にも農耕地に関する内容は乏しく、ハルザンシレグ土城、および周辺を発掘・調査することにより詳細なデータを手に入れ、遊牧民の農耕の実像に迫り、新たな遊牧国家像を提示する事ができると考える。

（３）ハルザンシレグ遺跡は、唐代より西方へ通じる交易路の重要拠点であったと考えられる。1997 年に新たに出土したトルファン文書より、、５世紀、モンゴル高原より高昌へ使者が頻繁に派遣されていた事がうかがえる。この出土資料より、アルタイ山を越えてモンゴル高原へ通じる交易路の存在が確認されるが、モンゴル国内部アルタイ山脈以東の交易地に関しての研究は見当たらない。また、トルコ系遊牧民の高車は 4 世紀には柔然の支配を受けていたが、5 世紀末になると西遷してトルファン盆地の北部へ至り独立国を築いた。しかし、彼らの具体的な本拠地や西遷のルート、その年代に関しては漢籍史料のみを用いた研究しかない。このハルザンシレグ土城の発掘結果を分析し、文書史料や漢籍と比較することで高車の西遷経路や年代を新たに確定できる。

２．研究の目的

（１）歴史学者や考古学者など分野の違う研究者が連携して研究することにより、これまで知られていなかった柔然や高車の農耕、交易の実像を明らかにする。また、これまで一般に「シルクロード」と呼ばれてきた交易路は、中国本土より河西回廊を通過して中央アジアをぬけるルートが主流とされてきたが、この調査によって発見された最新の出土資料を用いることにより、モンゴル高原からアルタイ山脈を通過して中央アジアへと続く交易ルートの重要性を明らかにし、これまでと違った新たな「シルクロード」像を構築できる。

(2) 高車は 4 世紀には柔然の支配を受けていたが、5 世紀末になると西遷してトルファン盆地の北部へ至り独立国を築いた。しかし、彼らの具体的な本拠地や西遷のルート、その年代に関しては漢籍史料のみを用いた研究しかない。このハルザンシレグ土城が高車にとっても西方へ拡大するための重要拠点であったと考えられており、この地の発掘結果を分析し文書史料や漢籍と比較することで高車の西遷経路や年代を、新たに確定できると確信している。以上のことから、再度ハルザンシレグ土城の発掘を行い、そこから得た成果を漢籍史料と比較

研究することは、これまで研究史上において知られていない柔然・高車の歴史、彼らの定住化の様相や農耕地の有無、モンゴル高原からアルタイ山脈を通過する交易ルートを確定する上でも重要であるといえる。

３．研究の方法

（１）本研究では、モンゴル国のハルザンシレグ遺跡の発掘調査をモンゴル国と連携して行い、研究のための基礎データを得る。また、柔然・高車時代に関する必要な史料・文献を収集する。その他の歴史文献史料の収集は中国でも行い、それらの整理を日本国内で行う。

（２）中田裕子（研究代表者・龍谷大学・講師）は 5、6 世紀における遊牧民・柔然、高車の支配領域とモンゴル本土の屯田地・ハルザンシレグ土城との関連性を研究する。また、この地を通過する交易ルートを考古学的成果、出土資料より明らかにする

（３）村岡倫（研究分担者・龍谷大学・教授）は漢文・ペルシャ語文献の史料整理に当たる。モンゴル国西部のチンカイ屯田を経由する西方との交通、物流に関して検討する。

（４）A. オチル（研究協力者・モンゴル国立国際遊牧文明研究所研究員・教授））はモンゴル現地での史料調査、発掘調査に協力する。

（５）李錦繡（研究協力者・中国社会科学院・歴史研究所・研究員）は中国国内における関連史料を収集し、モンゴルから中央アジアへ通じる交易路を検討する。

（６）王達来（研究協力者・内蒙古大学・講師）は中国語・モンゴル語が堪能であるため、モンゴル、中国側との連絡や史料収集の手助けを行う。

４．研究成果

（１）2016 年 9 月の調査では、モンゴル帝国時代に作られた等身大の仏像の一部と思われる足と手が発見され、C14 年代測定による分析結果から、13 世紀後半に作成されたものであることが判明した。この時代に作成された等身大の仏像の発見は希であり、2017 年 3 月にモンゴルで、2017 年 4 月に日本で記者会見を行った。さらに、2017 年 9 月に仏像の切り出しと保存、更に現地の発掘をすすめ、2018 年度は切り出した仏像の展示をおこなった。

当時のモンゴルでは仏教が信仰されていなかったことから、この仏像は、現地に居住していた漢人のためのものであったと考えられ、モンゴルは漢人たちの信仰を尊重したということが証明された。

2016 年度に発見された仏像

2018 年に発見された建物跡

（２）2017、2018 年度の発掘では、仏像が発見された周辺の部分を調査し、建築物の跡を確認することが出来た。これは、仏像を取り囲むような形となっており、仏像を宗教施設であることが確認された。上記の発見から、チンギス・ハン時代には仏像をともなった宗教施設が存在する聚落である可能性が示唆された。

（３）2016、2017 年度の発掘調査において、8 世紀時代の陶器片なども多数発見されており、モンゴル以前よりこの地に聚落があったことが明らかとなった。残念ながら、本科研費における調査では、5、6 世紀時代の遺物は発見できなかったが、前段階の調査でその時代の遺物が発見されていることから、その時代より人々の居住する聚落が存在していたことが明らかとなった。

（４）上記の発見から、ハルザンシレグ遺跡は、モンゴル高原から中央アジアへ向かう交通の要衝に位置していたと考えられる。ハルザンシレグ遺跡が、モンゴル帝国時代のチンカイ・バルガスであると考えられることは先学も述べているが、この地はチンギス・カンの中央アジア遠征を後方から支援した拠点でもあった。また、多民族融合の社会であったモンゴル帝国の時代に、東西を往来する多様な人々がこの地でどのような交流を行なっていたのか、今回発見された仏像は、この重要な課題を解明する手掛かりになると考えられる。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 4 件）
【論文】
①中田　裕子、唐代の同業者組合『行』とソグド商人、龍谷大学世界仏教文化研究論争、査読無、第 57 集、（図書の内容を日本語に翻訳・一部改訂）、2019、49-60
https://opac.ryukoku.ac.jp/webopac/TD32084218
②中田　裕子・村岡　倫、アルタイ地方におけるモンゴル帝国時代の仏像の発見とその意義—2016 年現地調査の報告をかねて—、東洋史苑、査読無、第 90 号、2018、1－37
③A.Ochir, D.Erdenebold, T. Matsukawa, K. Matsuda, H. Muraoka, Y. Nakata and G.Mandahbayar . 「ハルザン・シレグ・バルガスで実施した 2017 年度発掘調査の事前成果」『モンゴル考古学 2017』、査読無、2018 年、pp.223-229、（モンゴル語）
④K. Matsuda, H. Muraoka, A. Ochir, T. Matsukawa and Y. Nakata. 「モンゴル日本共同「ビチェース」計画,「エルデネゾー」計画の研究成果と展望」『オルホン渓谷遺産』、査読無、vol.4, 2017、 pp. 6-15（モンゴル語）。

〔学会発表〕（計 7 件）
①中田　裕子、2018 年モンゴル現地調査報告——僕固乙突神道碑に関して——、遼金西夏史研究大会、2019
②中田　裕子、蒙古国発現的仏像、欧亜学研究系列講座第 64 講、2018
③中田　裕子、唐代粟特商人的絹貿易与“商行”、新疆出土文献与絲綢之路－旅順博物館建館 100 周年国際学術検討会、2018
④中田　裕子、唐代におけるソグド人と行、2017 年度第 9 回仏教文化研究所談話会、2017
⑤中田　裕子、5-7 世紀蒙古高原交易据点和回鶻路的历史意義、絲綢之路上的民族、文物与歴史工作坊、2017
⑥中田　裕子、唐代粟特商人的絹貿易与“商行”、比較法史・域外之眼・全球史観：中国法制史研究新視野、2016
⑦T. Matsukawa, A. Ochir, K. Matsuda, H. Muraoka Y. Nakata.、モンゴル日本共同「ビチェース」計画,「エルデネゾー」計画の研究成果と展望、エルデネゾー430、2016

〔図書〕（計 1 件）
①中田　裕子　他、中華書局、『絲綢之路与新疆出土文献－旅順博物館建館百年紀念国際学術検討会論文集』（「唐代的粟特人与“行”」部分）2019、 631-641。

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：村岡　倫
ローマ字氏名：Muraoka Hitoshi
所属研究機関名：龍谷大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：30288633

(2)研究協力者
研究協力者氏名：A・オチル
ローマ字氏名：A.Ochir
研究協力者氏名：李　錦繡
ローマ字氏名：Li Jinxiu
研究協力者氏名：王　達来
ローマ字氏名：Wang dalai

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。